論文の内容の要旨および論文審査の結果の要旨

学位申請者氏名：藤川　君江　　学 位 の 種 類 ：博士（保健福祉学）
学 位 記 番 号 ：博（健）甲第 7 号　　学位授与年月日：平成 24 年 3 月 16 日
審　査　委　員：主査　高崎健康福祉大学教授　　渡辺　俊之
高崎健康福祉大学教授　　平山　宗宏
高崎健康福祉大学教授　　相澤　興一

論文題目

離島に生きる一人暮らし男性高齢者－Q 島におけるエスノグラフィー－

Elderly men living alone live in an isolated island – An Ethnographic study in the Q Island -

【論文の内容の要旨】

本研究は、日本の一人暮らし男性高齢者が元気に生活していくためには何が必要かを明確にするために計画された。離島の一人暮らし男性高齢者を対象にしたエスノグラフィー研究を行い、これからの日本の一人暮らし男性高齢者の生活の在り方について検討するものである。調査途中で起きた東日本大震災への島民の対応についても詳細に調査し、危機管理の在り方についても検討している。調査期間は、2009 年 7 月から 2011 年 9 月までの 2 年 3 か月間であり、Q 島滞在時は老夫婦が経営する民宿に宿泊した。Q 島の合計の滞在日数は 25 日間、インタビュー総回数は 35 回、1 回の面接時間は 40 分から 2 時間である。

Q 島の高齢化率は 68％と高く、一人暮らし男性高齢者は減少した。インタビューを行った高齢男性は 6 人であり、年齢は 70 歳から 88 歳であった。6 人の内 5 人の職業は漁師であった。漁師は食事作りから覚えていくため、全員が家事を負担とは感じていない。年金で経済的に自立した生活を送っていた。Q 島の一人暮らし高齢者は自分一人が老いているという実感は少なかった。島民はドアを常に開放しており、行き来が出来るようにしているが、「一人暮らし男性が一人暮らし女性の家を訪ねない」といった暗黙の了解が島にはあった。島民は、一人暮らしの高齢者の家の洗濯物などの状態から安否確認を行っていた。子ども達は全員が島外在住だが、高齢者と電話で頻繁に連絡をとりあっていた。Q 島の一人暮らし男性高齢者は常に前向きな姿勢があり、孤独を感じていない様子であった。

Q 島は東日本大震災の震源地の至近の場所にあったが死亡者がいなかった。島民全員に地震や津波ついての警戒意識が行き渡っており、経験からくる判断と島民同士の連帯感が迅速な避難を可能していた。断水に対しては、古くからある島の井戸水が活用された。

研究者は、エスノグラフィー研究を踏まえ、日本において男性高齢者が一人で生きていくためのポイントを５項目導き出している。第一は、「老いをスティグマとしないこと」である。Q 島では老人社会の中で生きているため、若者や中年から老人扱いされることはない。漁が中心の社会のため、高齢者同志もお互いにいたわりと思いやりをもって交流して

いた。第二は、「高齢者以外のアイデンティティを維持すること」である。Ｑ島の一人暮らし男性高齢者は、自分がやるべき日常的仕事を持っていた。高齢者以外のアイデンティを、できる限り維持するべきであろう。第三は、「精神的支援を重視すること」である。高齢者は子どもとは別居しているが、子どもとの良好な精神的繋がりが築かれていた。頻回の電話で、子どもは親をいたわり、親は子どもを精神的に頼りにして生活していた。第四は、「高齢者のコミュニティーの形成と参加」である。Ｑ島では家のドアを開放したままで、家と家のバウンダリーがない。しかし、身内と他人の区別がないわけではない。Ｑ島特有の暗黙のルールが存在するなど、内面にはきちんと境界をつくっている。高齢者コミュニティーの形成が推進される必要があろう。第五は、「危機時の対応については熟知していること」である。船上生活が長かった男性高齢者の多くは、危機時の対応は速やかであった。高齢者は災害弱者と言われている。危機時の対応については、自分の運動能力などを熟知し、避難方法、連絡方法などを常に意識した生活が必要であろう。

【論文審査の結果の要旨】

研究者は 20 年以上の看護師経験の中で、一貫して高齢者の心身の健康問題に関心を向けてきた。看護ボランティアで関わっていたＱ島において、一人暮らし男性高齢者が元気に生活していることに注目し、今後増加する日本の一人暮らし男性高齢者が生きるためのヒントがあると考え調査を開始した。

滞在中に島を歩き、島民やＱ島の医院のスタッフ、行政関係者との関係を築き、エスノグラフィーを方法論とした調査研究を行った。約２年間、船を使ってＱ島に渡り、一人暮らし男性高齢者の生活内容について参与観察とインタビューにより明確にしている。

調査期間中に発生した東日本大震災におけるＱ島高齢者の体験についての詳細な記述は、今後の日本における一人暮らし高齢者の防災意識や防災システムを検証する際の重要な資料になっている。

本研究で導き出された結果は、日本の一人暮らし男性高齢者の生活を支えていく上で説得力のあるものである。とりわけ、一人暮らし男性高齢者の被災体験や対応についての調査研究は、地震国である日本社会においても、重要な価値を持つと考えられる。

本研究は、１）独自性、２）調査内容の量と質の高さ、３）保健福祉への貢献が期待されるという点において博士（保健福祉学）の学位に十分値するものと判断した。